

染めを繰り返して 複雑な文様と 色彩の変化生み出す

室町時代にポルトガル、オランダなどの南蛮船によって日本にもたらされたといわれている更紗(さらさ)。布に染料で描かれた見たこともない動物や花、鳥などの柄と鮮やかな色彩。先人たちは初めて出合った布の美しさにどれだけ驚き、心奪われたのでしょうか。やがて更紗は日本人の手によって再現され、独自の技法と文様を築きながら、各地域で固有の更紗を確立していきます。「天草更紗」が初めて作られたのは江戸時代と言われています。その後、消滅と復興を繰り返して、昭和初期から中期にかけての復興を最後に、天草更紗は途絶えていました。

「私が最初に天草更紗に出合ったのは20年ほど前。染織を手掛けていたので、その独特な文様にはとても興味を覚えました。その後、天草市長、郷土史家の方などから復興を依頼され、文献など資料を頂き自分なりに研究をしていたのですが、それがとても大変なことでした」と語るのは、復興を手掛けた中村いずさん。天草市本渡町。

「誰かが手掛けなければ、このまま本当に途絶えてしまう。そんな思いが日増しに強くなり、使命感も湧いてきました。7年前、天草更紗を取り組むにあ

布に型紙を載せ、ヘラで染料で染めていく。一枚の型紙は切り絵のように図柄はつながっている



天草四郎をモチーフにした、平成の天草更紗。



たり、昭和に復興された故中村初義氏のご親族にご挨拶に伺いました。快く「あなたの更紗を制作していつて下さい」と激励をいただき、取り組む決心をしました。

わずかばかりの文献と数少ない作品を元に、文様の復元を始めた中村さん。更紗の技法は、まず文様を図案化して、型紙作りを始めます。型紙は特有の和紙に図案を彫刻していくのですが、一つの文様に数枚より複雑なものになると数十枚の型紙を彫ります。その型紙を一枚ずつ布に載せ、染料をヘラで染め、また別の型紙を載せては染め、何度も染めを繰り返して、あの複雑な文様と微妙な色彩の変化を生み出していくのです。

◆天草更紗◆



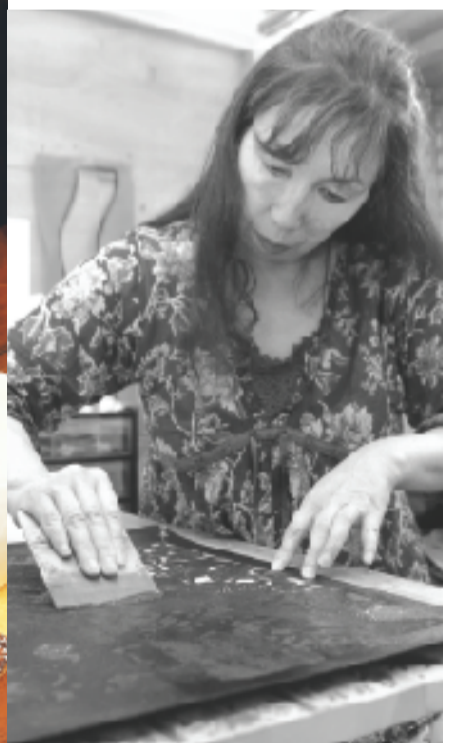
次の世代へ つなげていきたい

「文様の復元は苦労しました。一つの文様のデザインをおこし、数十枚の紙に彫り込んでいく作業。気が遠くなるほどの時間を要します。試行錯誤を繰り返す孤独な作業は、何年も続いたそうです。

天草更紗の文様は海藻であったり、亀、南蛮柿(今のイチジク)、動物物だつたり、天草などの生活に密着したモチーフが多いのが特徴。どこか異国情緒が漂い、和の滋味深さも相まって、見ていくと、穏やかに心が解き放たれていくような不思議な感覚に包まれます。

「この度、私は天草四郎や、天草地方にもたらされた南蛮文化の古楽器、聖杯などで、天草の歴史を物語る、平成の天草

岐阜出身の中村さんは、25年前結婚をきに天草へ移住。染織家として創作活動を続ける中、7年前より天草更紗を手掛け数多くの作品を生み出している

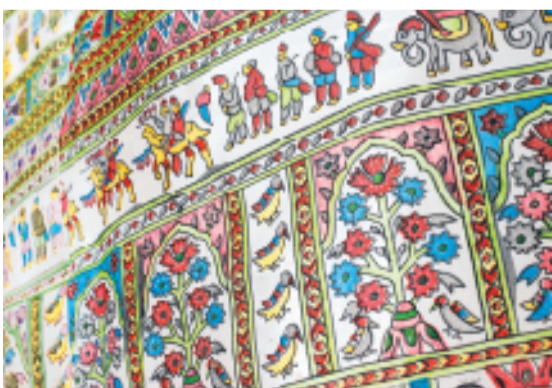


作品によっては、千回以上も重ね染めをするという
←バッグ5500円、器も中村さんの作品

更紗」と称してデザインしました」と中村さんが見せてくれた更紗は、天草四郎の持つ神秘的な美しさが描かれていました。

「ぜひこの技術を、次の世代へとつなげていかなければ」と思っています。私も出会いから20年の歳月をたどって、天草に身を置き、天草の風土が織りなす更紗を受け継ぎました。若い方が私の更紗と出合って、やってみようという方が現れてくれることを願っています」

江戸、明治、大正、昭和と何度も消えかけた天草更紗。平成の今、一人の女性の天草を愛する思いとともに、新たな命が吹き込まれました。長い年月にわたり人々を魅了してきた不思議な布。きつとまた誰かと深く結び付き、美しい命を紡いでいくことが、約束されているような気がしてなりません。



↑南蛮文化の影響を残す、ゾウやエキゾチックな鳥、花の文様。色彩豊かなこの作品は、染めが数百回以上繰り返されている



←染料や布地の素材によっても、同じ図案でも雰囲気が変わる。ペンケース2800円、ポーチ茶3500円、ポーチ3000円